行政視察報告書

　このたび、埼玉県幸手市、茨城県境町及び埼玉県さいたま市を視察した概要について、別紙のとおりご報告いたします。
　資料その他については、事務局に保管しておりますので、ご高覧ください。

令和５年１月３０日

厚生常任委員会

委　員　長	土田　百合子
副委員長	山形　健二
委　　員	柴田　　忍
委　　員	宮川　拓也
委　　員	林　　一輝
委　　員	立身　万千子
委　　員	青山　　豊
委　　員	佐藤　忠久

横手市議会議長　寿松木　孝　様

厚生常任委員会　行政視察報告書

■期　日　令和４年１０月３１日（月）～１１月２日（水）
■視察地　埼玉県幸手市、茨城県境町、埼玉県さいたま市

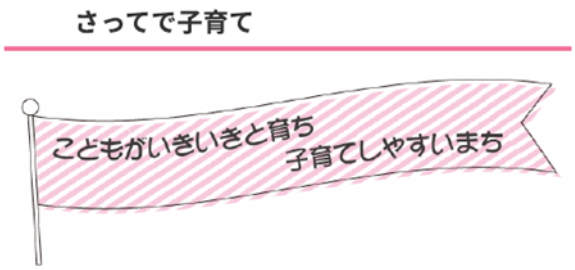
◎埼玉県幸手市（10 月 31 日訪問）

≪幸手市の概要≫

埼玉県北道部に位置し、東京から約 50 ㎞の地点にあたる。市の東部は千葉県、北部は茨城県と接している。地形は平坦で市内の標高差はわずか 11.2m。米どころとして有名で、かつては日本一美味しいお米として幕府に上納された「白目米」の発祥の地とされている。

幸手市では、少子高齢化が進展する中、「子育て応援日本一」をめざしており、家庭や地域と連携し、安心して子育てができる環境づくりを重点課題ととらえ、積極的な子育て支援を図っている。

主な取組として、市の保健福祉サービスを集約したウェルス幸手内に子育て総合窓口を設置し、子育てに関する手続きを一括でできるだけではなく、妊娠から子育てまでのさまざまな悩みを専門員に相談することができ、妊娠・出産・子育てを切れ目なくサポートしている。また、未就学児のいる子育て世帯の経済的負担軽減と農業振興に寄与することを目的に、幸手産米を給付するハッピー・スマイ（米）ル推進事業や、地域の相互援助活動活性化と子育て支援体制充実を図るため、子育てサークル、ボランティア団体などに対し子育て応援サークル等活動助成補助金（上限 30 万円）を交付する事業などを実施している。



■面　積：３３．９３㎢
■人　口：４９，４７５人　（令和４年１０月１日現在）
■世帯数：２３，０４４世帯（令和４年１０月１日現在）

≪調査事項：子育て応援日本一をめざす取り組みについて≫

《視察概要》

・幸手市の概要（出生数、合計特殊出生率）についての説明や、事前の質問事項に基づき、幸手市の子育て支援の主な取り組みについての説明を受けた。ウェルス幸手内には保健福祉の各課や子育て支援センター、社会福祉協議会などが１カ所に集約されており、子育て総合窓口の隣には子ども家庭総合支援拠点も設置されるなど、ワンストップ化されている。

・ベビーマッサージや親子クッキング等の子育てサークルに対する補助金交付や子育て支援ねっとわーくの活動推進など、子育てしやすい環境整備に取り組むとともに、学校給食費の補助（第２子半額、第３子以降全額）や「さってアフタースクール」と称した家庭教育学級の開設支援、英語検定料助成など就学後の子どもを持つ家庭への支援もきめ細やかに実施されている。また、子育て支援と合わせ農業振興に寄与するため、未就学児１人あたり年間玄米 60 キロを給付する「ハッピー・スマイ（米）ル推進事業」の実施や祖父母がより上手に子育てに関われるように子育ての昔と今の比較や知っておきたい事項をまとめた「じぃじ、ばぁばスタートブック」の配布を行うなど特色ある事業も実施されている。

・その他、令和４年度からは窓口にタブレット端末を設置し、手話通訳や外国語通訳ができるサービスの実施や子育て支援アプリの導入、Zoom を活用したオンライン子育て支援センターの実施など、様々なサービスを組み合わせ子育て支援を行い、出生率の改善に向けて知恵を絞り、取り組まれていることがうかがえた。

・質疑応答後、ウェルス幸手内を見学し、視察を終えた。

《主な質疑応答》

Ｑ：学校給食費補助制度は、市民からの要望を受けて実施されたのか、その経緯は。

Ａ：前市長が始めたものだが、前市長はＰＴＡ連合会の会長経験者であり、ぜひやるべきということでスタートした事業であった。補助対象者は滞納者を除くとしたところ、滞納がなくなった。

Ｑ：学童保育の設置場所がほぼ学校内となっているが、各学校との連携状況はどうか。

Ａ：各学校長からは自校の子どもたちが対象となるため、比較的好意的に捉えていただいており、学校外へ出るよりも安全ということから理解いただいている状況である。

Ｑ：幸手市の出生数や合計特殊出生率の推移から各種子育て支援施策の効果があまり出ていないのではと捉えることもできるが、この点について課題や手応えなどはどうか。また、このまま子育て支援に力を入れるのか、今後の方向性は。

Ａ：幸手市は 20 代女性の転出が多く頭を抱えているところであり、幸手に若い世代を取り込むきっかけづくりとして、今回ハッピースマイ（米）ル事業を実施した。結果がまだ結びついていないが、今後は子育て支援を継続しつつ、子育て世代をいかに取り込むかという仕組みづくりに力を入れていきたい。

Ｑ：子育て応援日本一を目指すにあたり、出生率や人口ビジョンにおいての具体的な目標数値は定めているのか。

Ａ：人口ビジョンでは目標数値を定めているが、「子育て応援日本一」については、子育てに力を入れていることをＰＲするための、スローガンに近いものである。

Ｑ：幸手市には保健衛生系の大学があるが、子育て支援施策を展開するにあたり、連携されている事例はあるのか。

Ａ：子育て支援施策では今のところ事例はないが、包括連携協定を結んでいることから、健康づくりや地域づくりの事業に関しては、大学の教授に助言をもらい、学生にも事業評価に関わってもらうなど連携しながら事業を進めている。

Ｑ：英語検定料の助成を始めた経緯は。

Ａ：学力テストにおいて英語の結果があまり良くなかった。英語に対するハードルを低くし、経済的なことで英検を受けられないということなくそうということで始めた事業である。市長の英語力を県内トップにしたい、世界で通用する子どもを育てたいという強い思いから予算化した事業である。

埼玉県幸手市　子育て応援日本一をめざす取り組みについて

幸手市　健康福祉部長　あいさつ

土田百合子・委員長　あいさつ

質疑応答

保健福祉総合センター　見学①

保健福祉総合センター　見学②

集合写真

◎茨城県境町（11 月１日訪問）

≪境町の概要≫

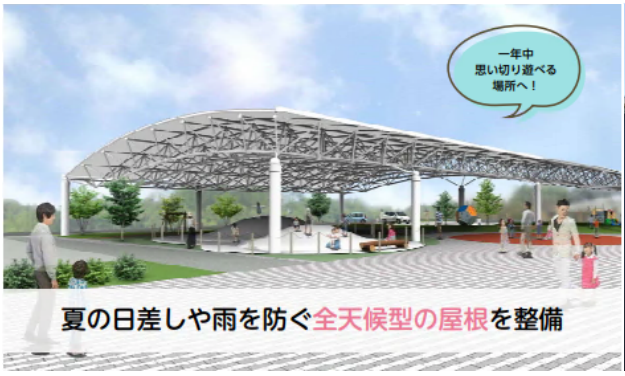
境町は、茨城県西地域の猿島郡にある町。古くは江戸と奥州を結ぶ交通の要衝として栄え、坂東太郎といわれる利根川と栄枯盛衰をともにしてきた「河のまち」である。春には、利根川の河川敷を菜の花が覆い、関東の富士見百景に選ばれるなど、自然に恵まれた水と緑の豊かな住みよい町である。

境町は、日本子育て支援協会主催の「第３回日本子育て支援大賞 2022」自治体部門を受賞した。無料で受けられる英語教育や、子どもを遊ばせながら安心して仕事ができる屋内型キッズランドを併設したコワーキングスペースなど、「子育て支援日本一」を目指す取り組みが評価されたものである。

主な取組として、町の子育てに関するサービスを分かりやすく紹介する子育て応援アプリ「ママフレ」や妊娠期から小学生まで、ヘルパー等が自宅訪問し、家事・育児をサポートするチャイルドケアプロジェクトを実施している。

また、夏の日差しや雨を遮り、天候に左右されることなく遊具を利用できる全天候型の公園（文化村ニコニコパーク）や子どもの未来を広げ、移住者を増やすため、世界最高水準のＢＭＸパークであるアーバンスポーツパークを整備している。

さらに、さかい子育て支援センターＳ－ＷＯＲＫ＋ＫＩＤＳは、子どもの居場所と保護者が子どものそばで仕事ができる空間（テレワークスペース）を併設しており、乳幼児の親子の遊び場、コミュニティの場として子育てを応援する施設となっている。



■面　積：４６．５９㎢

■人　口：２３，９４４人　（令和４年１０月１日現在）

■世帯数：８，９３７世帯　（令和４年１０月１日現在）

≪調査事項：各種子育て支援策の取り組みについて≫

《視察概要》

・道の駅さかいで、施設内にあるさかいサンドや沖縄県国頭村公設市場についての説明を受けた。その後、自治体初の定常運行している自動運転バスに乗車し、次の視察先である境町ニコニコパーク、アーバンスポーツパークへ移動した。自動運転バスは、ふるさと納税と補助金の活用で町の持ち出しゼロであり、公共交通による経済効果は７億円と試算されている。自動運転バスにはオペレーターが１人乗車しており、コントローラーで発進、停止などを操作し、安全のため低速で運行されていた。鉄道がない町にとって高齢者や子どもたちの貴重な地域の足となっていることを伺った。

・境町アーバンスポーツパークの見学では、国際基準のＢＭＸパークで世界トップ選手が参加する大会の開催やＢＭＸの専門家（地域おこし協力隊として移住）による子ども教室の開催などがされていること、将来境町から世界に羽ばたく選手を育てることをコンセプトに建設されたことなどの説明を受けた。

・次に、境町ニコニコパークを見学し、ふわふわドームやボーネルンドなどの遊具についての説明を受け、同敷地内に併設され地元歯科医が運営している「0yako 食堂ごはんの樹」で昼食をとった。昼食後、歯科医の中井氏から施設開設の経緯や運営内容などについての説明を受けた。予防歯科の浸透で虫歯になる子どもは減りつつあるが、歯並びの悪い子どもは増加傾向にあり、大人になってからではなく小さい子どものうちから健康な口を育て、食べることの大切さを考える場にするため施設を開設。口が開いたままの「ぽかんお口」を改善するためには、正しい飲み込ませ方を離乳期に覚えさせ、口元を子どもに見せることやスプーン選びの重要性などを伺った。

・次に、さかい子育て支援センターＳ－ＷＯＲＫ＋ＫＩＤＳに移動し、施設内の大型遊具やコワーキングスペース、フリーキッチンなどを見学した。その後、コワーキングスペースで、境町の主な子育て支援策であるスーパーグローバルスクール事業についての説明を受けた。すべての子どもが英語を話せる町になることを目的に始めた事業であり、フィリピンの英語力に目をつけ、町長自ら足を運び、国際交流をスタートさせ、町の小中学校に１校当たり約３人のフィリピン人講師を配置した。また、英検を学校で受験できるようにし、受験料は町負担とすることで、受験率は２倍以上増え、中学３年生の英検３級保有率は５倍近くになったとのこと。さらに、留学先を増やすため、ハワイのホノルル市とも姉妹都市になり、サマースクール、サマーキャンプを行うことで、英語教育の充実を図り、境町に住んで子育てしたい、英語移住したいと思わせる魅力ある子育て環境づくりに努めていると伺った。

・その他子育て支援策についての質疑応答後、ふるさと納税返礼品の上位である干し芋やワインなど、地場農産物の六次産業化を推進する施設であるＳ－Ｌａｂを見学し、視察を終えた。

《主な質疑応答》

Ｑ：グローバルスクール事業について、留学する場合、相手の伝統や文化などを学んだ上で交流を図ったほうがより交流が深まると考えるが、社会的な学びや知識についても事業の中に取り入れて行われているのか。

Ａ：自分の住んでいる町のことを英語で話し、相手方（ホノルル）の町の話を聞くなど双方の文化を紹介し合うこともサマーキャンプのプログラムに盛り込んで行っている。

Ｑ：世界での競争力向上と英語移住を狙いの事業と思うが、町が投資した分の還元については、どのように考えているか。

Ａ：子どもたちの将来の年収が上がり、国際的に活躍する人材を育てることが目的であり、町だけに還元するという考えはない。

Ｑ：保育園の民営化により職員の給与が上がったとのことだが、どのような仕組みか。

Ａ：財政難で公立保育所の臨時職員を正規雇用できないという課題があったが、民営化による国・県からの補助金増加に伴い、臨時職員が正職員になったことで給与アップを図ることができた。

茨城県境町　各種子育て支援策の取り組みについて

道の駅さかい　見学

自動運転バス　乗車体験

文化村・ニコニコパーク　視察

Oyako 食堂　歯科医師：中井氏　食育講話

S-WORK＋KIDS　視察＆座学、質疑応答

集合写真

◎埼玉県さいたま市（11 月 2 日訪問）

≪さいたま市の概要≫

さいたま市は、埼玉県の南東部に位置する県庁所在地。古くは中山道の宿場町として発達してきた歴史を持ち、現在は東北・上越など新幹線６路線を始め、ＪＲ各線や私鉄線が結節する東日本の交通の要衝となっている。平成 13 年５月に旧浦和・大宮・与野の３市合併により誕生し、平成 15 年４月には全国で 13 番目の政令指定都市へと移行し、平成 17 年４月の旧岩槻市との合併を経て、関東圏域を牽引する中核都市となった。

さいたま市は、子ども・家庭をとりまく課題に取り組み、子ども・家庭、地域の子育て機能を総合的に支援する施設である子ども家庭総合支援センター「あいぱれっと」を平成 30 年４月に開設した。

施設の１階には、乳幼児の遊び場「ぱれっとひろば」、小学生の遊び場「屋根付き運動場」、中高生の集いの場「中高生活動スペース」といった子どもや保護者等の居場所・交流の場があり、その近くに総合相談窓口を設置することで、気軽に相談でき、子どもや家庭が抱える多様な問題に専門相談機関等と連携を密に図り、迅速にサービスのコーディネートを行っている。施設の屋外には、子どもの「やってみたい」気持ちを大切にしたプレイパーク「冒険はらっぱ」が設置されており、子どもから大人まで交流・活動ができる機能も備えている。

■面　積：２１７．４３㎢

■人　口：１，３３８，８１０人　（令和４年１０月１日現在）

■世帯数：６３０，６４５世帯　（令和４年１０月１日現在）

≪調査事項：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて≫

《視察概要》

・あいぱれっとの施設概要について、説明を受けた。今年で５年目となる施設で、１階は市民利用、２階から４階は市の専門相談機関が入っており、乳幼児から青少年を含む幅広い年代の子ども、家庭、地域の子育て機能を総合的に支援するための市の中核施設となっている。また、子育て支援の様々な担い手が知識や知恵を提供し合って協働し、子どもや青少年が心身共にすこやかに育つ子育てしやすいまち、若い力の育つまちの実現を目指して運営されているとのこと。

・概要説明後、施設見学をし、総合相談機能、ぱれっとひろば、冒険はらっぱなどについて詳しく説明をいただいた。見学後、事前質問事項について回答いただき、質疑応答を行い、視察を終えた。

《主な事前質問に対する回答》

Ｑ：施設の整備費はどのくらいか。

Ａ：建設費総額約 57 億円（設計：約１億 8,000 万円、工事：約 52 億円、その他業務委託：約３億 5,000 万円）。

Ｑ：相談対応者は有資格者か。その場合は、どのような資格か。

Ａ：直営のなんでも子ども相談については、常勤は保健師、福祉職職員、会計年度任用職員は資格要件を設けていないが、主に保育士、教員免許、幼稚園教諭等の資格を有し、子ども・子育てに関する相談業務経験を有する者が配属されている。指定管理の部分も同様である。

Ｑ：子どもの遊び場と相談できる場を一体化させたメリットは何か。

Ａ：遊び場に付帯して総合相談窓口を配置することにより、来館者が相談サービスを気軽に利用でき、相談窓口においても子どもや家庭が抱える多様な問題を吸い上げることができることがメリットの一つ。また、問題に対し、本施設に集積している専門相談機関と連携を密に図り、迅速にサービスのコーディネートを行うことができている。

Ｑ：プレイパーク「冒険はらっぱ」の事業概要は、どのようなものか。

Ａ：本事業は、「ＮＰＯ法人たねの会」に委託して実施しており、子どもがやってみたいと思う遊びを子ども自身が考えてつくり、基地や遊具をつくるなど、禁止事項をなるべくつくらず、思い思いの遊びができる場となっている。

《主な質疑応答》

Ｑ：施設の指定管理料、維持管理費は年間どのくらいか。また、たねの会への業務委託費はどのくらいか。

Ａ：施設の指定管理料は年間約１億 3,000 万円で、このほか維持管理業務委託費として年間約 8,000 万円、清掃業務委託費として約 1,900 万円となっている。また、たねの会への業務委託費は 1,200 万円となっている。

Ｑ：直営部分の経費はどのくらいか。また、建設費と維持管理費の負担軽減のため、ネーミングライツ導入などの検討はされているのか。

Ａ：基本は業務委託となるが、小破修繕は直営で行っている。ネーミングライツについては今のところ検討していない。

Ｑ：プレイパークの「冒険はらっぱ」をこの施設に取り入れた経緯は。また、委託先を選定した理由とプレイパークを取り入れる段階から当該団体は協議に加わっていたか。

Ａ：施設の建設計画当時に、公園の利活用に向けてプレイパークのアイデアが挙がり、週末のみ臨時で実績を積み重ねていた経緯があったが、この施設にも丁度良いグラウンドがあったこと。また、当時、川崎市の子ども夢パークができた頃で、本施設のコンセプトとマッチすると考え取り入れたものである。また、委託先選定の理由は、市内で活動している団体が当該団体のみだったためであり、導入の協議には加わっていない。

埼玉県さいたま市　子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

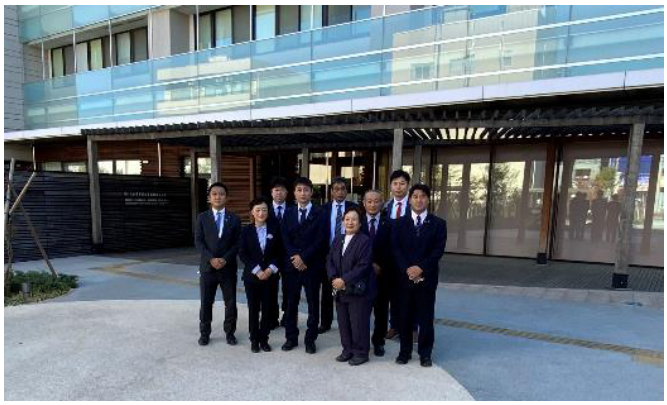
土田百合子・委員長　あいさつ

あいぱれっと　見学

冒険はらっぱプレイパーク　見学

質疑応答

山形健二・副委員長　お礼のあいさつ



集合写真

≪視察を終えて　～委員所感～　≫

土田百合子 委員長

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて

主な取り組みとして「子育て総合窓口」、「ハッピー・スマイ（米）ル推進事業」「子育て応援サークル等活動助成補助金」、「じぃじ、ばぁばスタートブック」を行っており、その他にも、産後ケア事業や子育てしながら働きたいママを応援する事業、市役所内にハローワークが設置されているなどの取組みをされていた。また、学校の給食費を補助（２人目は半額、３人目は無料）するなどの取組みも展開されている。

幸手市の合計特殊出生率は、平成 30 年度は、最悪の 0.83 であったが、令和２年は、1.08 と上がってきている。令和２年の統計出生数では、平成 22 年 415 人をピークに、令和２年は 212 人の半数に減少している状況にある。

保健福祉総合センター内には、令和４年度から「子ども家庭総合支援拠点」が設置され、子育て支援センター、幸手東地域包括支援センター、ファミリーサポートセンター、家庭児童相談室などが設置されている。この中で子育て総合窓口（ワンストップ窓口）が設置されていることが一番重要と考える。子育てに関する手続きだけでなく、妊娠から子育てまでのさまざまな悩みを専門員に相談することもできる。

当市において取り入れたほうが良いと思った事業は、食品価格の高騰により経済が大変であることから、「ハッピー・スマイ（米）ル推進事業」は、米どころである当市でも実施できる事業と感じた。また、「子育て応援サークル等活動助成補助金」は、コロナ禍で現在は活動が思うように進んでいない状況にあったが、子育て家庭を応援する事業を行う子育てサークルやボランティア団体に対し地域の相互援助の活動活性化と、子育て支援体制の充実と推進を図るために、上限を決めて補助金を交付している。

このような事業があれば子育て支援の充実を図る事が出来ると考える。また、「じぃじ、ばぁばスタートブック」は、初孫の誕生にどのように接して対応すればよいのかを知るきっかけとなると感じた。ブックの内容は「子育ての昔と今、赤ちゃんのお世話あれこれ、子育て・孫育ての本音、孫と一緒に行ける遊び場」などが掲載されているので是非提案したい。

出生数を上げるため、生活に密着した細やかな事業展開をされて取り組んでいる。「子育て応援日本一をめざす」という市長の意気込みは伝わってきた。しかしながら、幸手市の統計出生数の減少から子育て支援政策が必ずしも出生数につながらないということについては、大変に厳しいと感じた次第である。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

境町は、日本子育て支援協会主催の「第３回日本子育て支援大賞 2022」自治体部門を受賞している。境町の主な取り組みとして、英語教育に力を入れ人財育成を行っている。

その他にも「子育て応援アプリママフレ」「チャイルドケアプロジェクト」「文化村

ニコニコパーク、アーバンスポーツパーク」「さかい子育て支援センターＳ－ＷＯＲＫ＋ＫＩＤＳ」などの取り組みを視察した。

境町の先進的な英語教育の取り組みについては、すべての子どもが、英語を話せるようにと、英語教育を行う「スーパーグローバルスクール事業」として、フィリピン英語教師を招聘し、小学校１年生から日常的に英語に触れながら小中学校９年間を通して、実用的な英語力を身に付け、グローバル社会で活躍できる人材を育成している。「英語力ＵＰチャレンジ事業」として英検受験料金を町が負担し、受験料無料で中学３年・小学６年、全員が受験できる制度を整備した結果、受験率２倍、中学３年生の英検３級以上保有率 42.3%となっている。費用を町が全額負担する政策を平成 30 年から完全実施し、今後は、子どもたちを海外に派遣し、境町に住めば子どもが海外に行ける取り組みをするとの事である。

財源は、ふるさと納税で平成 25 年度は６万円だったが、令和３年度は 48 億円の寄付額で県内１位となって継続中。町長は、住み続けたい街にするために、移住政策、子育て支援、持続可能な勤め先、教育支援が揃ってこそ、人が訪れ、住み続けたいという町になるとの信条のもと、他に先駆けた政策を多く実現している。

令和２年 11 月からは、全国初となる自動運転バスの運行がスタートしている。誰もが、無料で乗車でき移動の足に困らないように、また観光客の移動手段としても効果を発揮している。運転席は無くコントローラーで走行。先進的な未来の乗り物に感動した。

文化村ニコニコパークは、大型の屋根付きで天候にも左右されない公園でエアートランポリンや路面に落書きできるスペーススプリング遊具で乗って遊ぶことができる。

さかい子育て支援センターでは、子どもの居場所の提供、保護者が、子どものそばで仕事ができるような仕組みや子連れでのテレワークスペースもあり、子育てしやすい環境だと感じた。天候にも恵まれ素晴らしい視察となった。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

あいぱれっとの取り組みについて「さいたま市子ども家庭総合センター」を視察した。施設の目的は①総合相談の実現、②親子や小中高生の居場所・交流の場の実現と相談への誘導、③市全体の子育て支援力の向上、④地域活動、世代間交流の推進となっている。

人口１３３万８千人の施設にふさわしく広々とした遊び場、交流の場があり、相談体制も充実していた。子どもを見守りながら、子育ての相談もできる。冒険原っぱでは、泥んこ遊びや探検ができる遊具や、子どもがやってみたいと思えるあそび場を提供している。

当市の冬期の屋内施設での遊びができる施設はほとんど無い状況にあることから、広々とした子どもたちが元気に遊べる施設、保護者の交流の場となる施設があれば良いと感じた。今後の子育て支援施設には、是非とも子ども・家庭を取り巻く課題に総合的に取り組む「子育て総合窓口」の強化を提案したいと考える。

山形健二 副委員長

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて

未就学児を養育している世帯に米を 30 kg給付していたり、ゴミ袋有料化のタイミングで乳児紙おむつ用ゴミ袋を支給したりと、きめ細かい子育て支援をしていると感じた。

日本一を目指す取り組みはまだ始まったばかりであり、今後の展開を注視したい。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

まさしく子育て支援策日本一ではないかと感じた。あったらいいなという支援策を全て全国トップレベルで支援している。子育て世代の移住定住支援も全国トップレベル。

大きく見ると人口減少対策の中の子育て支援の充実という考え方だと思った。

事前にかなり調べている段階で、なぜこんなにできるのかということが、現地の視察で知ることができた。境町がふるさと納税で稼げる町になったことが大きな要因でもある。

ぜひ、他の委員会でも視察に行ってほしい、議員全員に行ってほしい町であった。

横手市長もすでにふるさと納税の取り組みについて視察に訪れていたようだった。境町スタイルを是非、取り入れてほしい。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

子育て支援施設の取り組みの例として「あいぱれっと」を視察。

大きな建物の中に子育てに関連する相談窓口が集約している。一ヶ所で様々な相談やサービスを受けられることは魅力的だと感じた。

敷地が広いので冒険はらっぱプレイパークもあり、横手市にもこういった子どもたちが集まって自由に遊べる空間をぜひ作りたいと思っていたので、運営方法など参考にしたい。

柴田忍 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取組みについて

ワンストップ窓口に専門員を配置して子育てに関する様々な相談が出来るサービスシステムは大変参考になる。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

子どもたちの未来のための支援体制が徹底していると感じた。

さらに、チャイルドケアへの取り組みは当市でも一考してみてはどうかと思った。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

子育てに関して総合的に案内されていて、特に未就学児をもつ親たちにとっては心

強い応援施設になっていると感じた。

宮川拓也 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて

「子育て応援日本一」を目指す取り組みについて、少子・高齢化社会に対応し、市の保健福祉サービスの中枢を担う保健福祉総合センター「ウェルス幸手」を視察。妊娠から子育てに関する窓口が集中して一括で手続き、支援ができる形になっており、利用側の市民からしても利便性と安心感を持って相談できる環境にあると感じた。

また、子育て世帯に地元のお米を給付する「ハッピースマイ（米）ル」という事業や、子育て家庭を応援するサークルやボランティア団体に対して支援をする「子育て応援サークル等活動助成補助金」など、様々な子育て支援に力を注いでいる取り組みを学ぶことができ、横手市でも参考にできる事業があると感じた。

一方で、近隣自治体も同じような事業を行なっていることもあり、思ったように子育て世帯の移住や若年層の人口流出が止まらない現状にあり、施策を行う上で近隣自治体の事業把握、差別化、大胆な投資も必要と感じた。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

「日本子育て支援大賞 2022」を獲得した境町の取り組みについて、子育て支援センターや各種事業のお話を伺った。受賞に相応しい程の先進的で充実した取り組みから学ぶことは多く、他の自治体から毎日視察があるというのも納得できる視察先であった。

人口２万４千人程の町にもかかわらず、全小中学校、保育園での先進英語教育を無料で行なったり、保護者が仕事ができるワークスペースを子供が遊べる支援センターに増設したり、子育て世帯への家賃補助があったりと様々な細かなところまでの投資を積極的に行なっていて、町長の子育てに対する意気込みが伝わってきた。

子育て支援以外にも、自動運転バスの導入や世界水準のＢＭＸパークを整備したりと、町外の人にとっても魅力ある街づくりをすると同時に、移住者獲得のために移住促進住宅を建設したり、東京へ１日８本も高速バスを走らせるなど、移住にも本気で取り組んでいる様子が伺えた。こうした将来のビジョンをしっかりと持った街づくりと設備投資には非常に興味深くお話を伺うことができた。

決して大きくない町でこれほどの投資ができているのは自主財源があるからだという。令和３年度のふるさと納税は 48 億円を突破し、町の大きな収入源となっている。これを元手に地域の産業発展に投資をし、さらにふるさと納税や税収を上げるといった好循環ができている。地域がうまく回っている良い見本を見ることができた。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

子ども、家庭、地域の子育て機能を総合的に支援するさいたま市子供家庭総合センター「あいぱれっと」を視察。施設の目的にあるように子育てから家庭の悩みなど総合的な相談窓口としてその機能を果たしていた。

さいたま市の中心に位置していながら大型施設として多くの人の受け入れが可能で、全天候型の屋根付き運動場が中庭にあり、施設内から子どもの遊ぶ姿を安心して見られる環境だった。全天候型施設は雪の多い横手でこそ実現したいと思った。

また、都会ではなかなか体験できないであろう泥んこになって遊べる「冒険はらっぱ」という屋外の遊技場では土に穴を掘ったり泥団子を作って遊べたり、秘密基地のようなものまであり、都会で暮らす子供たちには自然の中で遊べる貴重なスペースとして存在していた。

屋内の「ぱれっとひろば」は最大 100 人以上が遊べるような大きなスペースに様々な遊具があり、月齢期の赤ちゃんから就学前の子供たちまで自由に遊べて、保護者も子供を見守りながらゆっくりとくつろげるスペースは素晴らしいと感じた。

地域性として、転入出が多く、周りに知り合いも友達もいない保護者にとって、このように子育てに関する相談、交流ができる大型施設があるのはありがたいだろうと感じた。

横手とは自治体規模や子育て環境が大きく異なるものの、必要な支援やサポートでは共通する部分もあるため、相談と支援のしやすい環境を整えることは大切だと改めて感じた。

林一輝 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて

幸手市の子育て支援に対する取り組みを聞いて、特別大きな事業を行っているわけではないが、きめ細やかな施策が実施されていると感じた。

「子育て支援ねっとわーく」は 34 の団体や個人が参加しており、コロナ禍においてもこの会が運営委員となり、実施方法を検討して年に１回「子育て応援まつり」を実施していた。横手市の「よこてすくすく子育てねっと」は近年活動が下火になっているが、こういった形を取る事によって会の活性化に繋がるのではないかと感じた。

「家庭教育学級」は幼稚園や小中学校などを拠点として、保護者同士が子育てに関する学びについて自ら企画し、計画的・継続的に活動していくもの。保護者が内容を工夫し、申請件数も毎年それなりにあるとの事で、保護者の関わりが希薄な現代において良い取り組みであると感じた。

「ハッピー・スマイ(米)ル事業」については、実施したばかりという事で成果は伺えなかったが、引き換え率や利用した市民の声等は、後ほど是非聞いてみたいと思った。また、部長より「なぜ子育て支援とお米か」という声もあるが、そういった入り口でも幸手市を検索してもらう、興味を持ってもらう事が狙いとのお話を頂き、横手市でも他市町村、他県に注目してもらえるような施策は実施すべきと思った。

「じぃじ、ばぁばスタートブック」は素晴らしい取り組みだと思ったが、出産時に全員への配布ではなく、任意での持ち帰りとの事でそこは是正すべきかと感じた。

ただ、「子育て応援日本一をめざす」として子育て支援の施策に力を入れている幸手市においても、出生数や人口の増加など目に見える形で成果は現れておらず、やはり施策を実施して直ぐに効果が表れるという事は稀で、ある程度中長期的に考えてい

かなければならないと再認識した。そういった面からも、横手市も直ぐに子育て支援に関する施策を実施すべきだと感じた。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

子育て支援に対する取り組みを学ぶ為に伺ったが、財源の確保・街づくり・高齢者福祉等々好事例ばかりで、学ぶ事ばかりの視察になった。

平成 25 年の財政状況は北関東ワースト１位だった境町は、このままでは財政破綻してしまうという危機感から財政再建に乗り出した。新財源の獲得方法として「ふるさと納税」に着目し、令和３年度の納税額は 48 億円で７年連続茨城県１位、５年連続関東１位という実績。また、太陽光発電事業を通しての資金確保や新規補助金等の獲得も積極的に進めている。

こうやって得た資金で、自動運転バスの導入、東京行の高速バスの運行、公園や子育て支援施設の建設等々、他市町村や他県から注目される施策を次々と実施している。これが好循環を生み、ふるさと納税の更なる増額、移住定住者の増加(住民税の増加)など町の活性化、メディアや他自治体の更なる注目を得るという結果になっている。

町長の手腕でここまでのＶ字回復を見せている境町ではあるが、ご説明頂いた公社の担当者から「町長は、全国どこでも真似が出来るようにしたいと考えている」、ＴＴＰＰＡ(徹底的にパクってパクってアレンジする)をして欲しいとのお話があった。全てが横手市でも実現出来る事ではないと思うが、取り入れられる事も多々あると感じた。今後横手市が持続可能な街であるためにも、ＴＴＰＰＡで横手市ならではの施策に展開していくべきである。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

あいぱれっとを視察して、プレイパークに感銘を受けた。以前からプレイパークの存在は気になっていたが、実際に話しを聞いて目で見て、自然も多く、比較的土地も手に入りやすい横手にもあるべきだと思った。最低限のルールの下、外で子ども達が自主的に遊ぶ。これこそ現代のゲームやＳＮＳ、ネット等に夢中になる子ども達に必要な事だと思った。

参考になるところも多々あったが、一方で横手では「よこてすくすく子育てねっと」で市・支援センターとサークルが繋がる事が出来ているが、さいたま市ではまだサークル等の市民の横の繋がりがなく、今後活動発表等で繋がりを作っていきたいとの事であった。また、横手の子育て支援センターでは、おやつ等の飲食が出来るが、ぱれっとひろばに隣接するつながりカフェでは食べる事が出来ない。利用人数が多い事等に起因するのかもしれないが、子どもが遊んでいる途中でおやつも食べられないのは中々大変だと思った。

学ぶ事は多かったが、横手の方が優れている点も多々見られたので、そういった点は横手市が今後対外的に積極手にＰＲしていくべきだと感じた。

立身万千子 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて

「子育て応援日本一を目指す取り組み」について、とりわけ興味深い点をピックアップする。

①子育て総合窓口＝健康増進課と子ども支援課に加え、介護や高齢者福祉担当課、社会福祉協議会も同センター内にあり連携がスムーズにできる。

＊母子保健コーディネーター（幸手市助産師会に委託）と利用者支援専門員（保育士）に加え、こども家庭総合支援拠点として、こども家庭支援員（精神保健福祉士）が常駐して相談対応する。今後の課題は、関係機関とのネットワーク構築と、母子間とのかかわりを密にすること（助産師のアセスメント訪問など）。

②子育て支援ねっとわーく＝34 団体と個人で月１回会議開催。

（通信発行、学習会や交流会、子育て応援まつりの企画運営）

子育て支援のみならず街づくりの推進を図る。自治体等に対する政策の提案や要望活動を展開。

③子育て応援サークル等活動助成補助金＝毎年 30 万円上限で３年間（現在、延長を検討中）。年間３団体でパパママ教室の卒業サークルなどだが、０歳～２歳対象に拡大する必要性あり。

④紙おむつ用ゴミ袋支給事業＝出生届の後、こども医療費や児童手当の手続きに窓口来庁の際、手渡しする。予算計上は無しで、指定の燃やせるゴミ収集用ゴミ袋（30ℓ相当）50 枚。

⑤学校給食費補助制度＝前市長が市ＰＴＡ連合会長経験者であり。

トップダウン（滞納者の調査により徹底してゼロになったため）

特別支援学校・小中学校に２人以上在籍している第２子が半額・第３子以降全額補助。令和３年度は 814 人対象で 2076 万 4027 円支出・令和 4 年度は予算額 2293 万円。

⑥じいじ・ばあばスタートブック＝2016 年の一般質問で提起され、さいたま市に学び市民アンケートやスタッフの意見で開始。世代間のギャップを埋める必要性による。

⑦家庭教育の学習支援と「家庭教育学級」開設支援＝子どもの健全教育を目的とし、小学校入学前の講座や小学校３～６年生向け算数中心の復習問題を独自のプリントで放課後週２回支援。

実用英語技能検定団体検定料助成（公立中学校３年生対象）１回 4,700 円（１級～３級）。

⑧ハッピー・スマイ（米）ル推進事業＝「幸手産米引換券」未就学児１人あたり玄米 60 kg（5 kg引換券 12 枚）幸手市内に住民票がある未就学児を養育している世帯主が対象で引換場所はＪＡさいたまみずほ農産物直売所。

とてもキメ細かい施策を講じていると感じた。特に紙オムツの処理はたいていの人が困っている。その袋も主食の米も現物支給。学校給食などの費用を補助して、子育て世代への具体的な支援は「幸手に住んで、子育てしたい」と思える施策だと思う。核家族が多いといわれる幸手市でも「じぃじ・ばぁばスタートブック」を作成して普

及させていることに、ハッとさせられた。横手市でもすぐ取り掛かれる課題と思う。少しずつでも前に進むこと。そのためにも部局連携を真剣に推進することの必要性を痛感した。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて

「各種子育て支援策の取り組み」について、膨大な資料から報告。

日本子育て支援協会主催の「第３回日本子育て支援大賞 2022」の自治体部門を受賞した。それまでの経緯が次のとおりである。

＊境町にとっての喫緊の課題は人口減少（横手市と同じ）。これを克服するため「３つの創生」＝まち・ひと・しごと創生総合戦略。

①プロフェッショナル職員がまちの未来を創る（組織改革・産官学連携・専門知識の導入→職員の民間意識を高め、平成 27 年 92.9 から１年間で 96.7 のラスパイレス指数（県内ワースト２位から最高の上げ幅）となった。例：たくさんのスポーツパークを整備した＝負の遺産（建設費・運営管理費）になりがちな問題の解決は…企業版ふるさと納税が大半で、市の一般財源は使わない（自己財源を充当する部分を企業からの投資・スポンサー・広告宣伝費等で補う）。

＊無料で受けられる英語教育・子どもを遊ばせながら安心して仕事ができる屋内型キッズランドを併設したコワーキングスペースなど子連れテレワークのスペースが充実している。東京八重洲まで約 50 ㎞の近さは高速バスの利用も利に叶い、通学も時々本社出勤という形式の生活スタイルもできる。さらに道の駅さかいの充実ぶりもすごい。

トップの推進力が住民を牽引し、住民も信頼していることが子育て支援の充実に繋がっている。良い意味のしたたかさが必要と感じた。もう１つ興味深いことは、子育て支援センターの近くにある歯科医院で経営している「おやこ食堂」だった。離乳食を含め、歯の力を育てるメニューが満載で、わが市でも実現できないものかと思った。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

公立学校の跡地。指定管理料：年間１億 3,000 万円（維持管理）事業内容は NPO 法人たねの会に 1,200 万円。

＊目的：①総合相談の実現（保健師・福祉職職員・保育士・教員免許保持者・看護師・精神保健福祉士など数名が常勤）

②親子や小中高生の居場所・交流の場の実現と相談への誘導

③市全体の子育て支援力の向上

④地域活動・世代間交流の推進

これら４つの目的を持ち、相談機関と連携を迅速に密にとれる。

今後の課題＝来館者は比較的近隣の住民が多く、居住地域に偏りがある。さらなる来館者の増加に努めたいとのこと。

貸し館事業もしており、その中で自主活動サークルが見えてきた。今後は連絡を密

にし、活動発表等に発展させていきたい。
　貸し館事業以外には使用料金はとらない…子育て支援の位置づけ！

　施設の整備費は建設費が約 57 億円とのこと。都市計画分野で公園の利活用を協議しさらに拡充を目指している。川崎の夢パークに学び、子ども達自身が考えて作る遊び場で焚火・泥んこが素晴らしい。

青山豊 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて
　非常にきめ細かく、幅の広い取り組みを行っているとの印象を受けた。特に学校給食費補助制度やハッピー・スマイ（米）ル推進事業は現下の物価高騰にもマッチするし、食育の視点からも重要。米どころ、複合農業県ナンバーワンである横手市も“ならでは”の子育て支援があってよいと思う。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて
　まさに“気づきの宝庫”。「子育て支援の充実は高齢者福祉にもつながる」という町長の信念と５年後に「誰もが生活の足に困らない町」を目指すという確固たるビジョンのもと、ありとあらゆる仕掛けを街中にちりばめる実現力がすばらしい。そして、その財布を補助金のみならず自主財源に求めて、ふるさと納税に力を入れる努力と工夫に頭が下がる思いだった。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて
　あいぱれっと内にぱれっと広場や冒険広場を設置し、子どもたちが自由にのびのびと遊べる環境の整備に注力している点は参考にすべき。特に冒険広場は川崎市の「子ども夢パーク」のミニチュア版のようで（←私の感想）、このような施設は横手市でも空き校舎を活用して整備する手もありだと感じた。

佐藤忠久 委員

◎埼玉県幸手市：子育て応援日本一をめざす取り組みについて
　出生数増加に向け、知恵を絞りながら、さまざまなサービスを組み合わせてきめ細やかに事業展開されているところが印象的であった。また、農業振興と子育て支援を組み合わせた特色ある事業も実施され、地元の強みを生かした取り組みは参考になった。当市でも、さまざまな取り組みを行っているが、特色ある事業も取り入れていく必要性を感じた。

◎茨城県境町：各種子育て支援策の取り組みについて
　国際基準のＢＭＸパークの整備やスーパーグローバルスクール事業は、世界で通用する人材を町から育てることを目的とした先進的な子育て支援の事例であった。国際交流を推進する世界に目を向けた事業展開は、子どもの英語力向上に加え、英語移住

したいと思わせる魅力的な子育て環境につながっていると感じた。また、自ら稼ぐ町として補助金の有効活用、民間力の活用やふるさと納税による財源確保により、新たな施設、事業への投資を行い、その取り組みが雇用、収入を生む良いサイクルを実践されていることは非常に合理的で、自治体の持続可能な取り組み手法として学ぶべきところと感じた。

◎埼玉県さいたま市：子ども家庭総合センター「あいぱれっと」の取り組みについて

子どもの交流の場と相談機能を兼ね備えた施設であり、気軽に相談でき、その後施設内に集約されている各種専門機関へ迅速につなぐことができる仕組みは魅力的の一つと感じた。また、子どもが伸び伸びと遊ぶことができる居場所や機会が少なくなってきている昨今において、子どもが自分の責任で自由にありのままに遊ぶことができるプレイパークは、子どもの成長にとって重要なものであると感じた。

以上、報告いたします。